



「サウイツモノニ / ワタシハナリタイ」

新年おめでとうございます。よき新春をお迎えのことと、お喜び申し上げます。

さて、今年は「卯年」です。卯年は「飛躍」や「向上」の年と言われます。また、過去をさかのぼると、卯年には、時代の終わりや始まりを告げる出来事が多く起こっています。2022年は前年から続いて、新型コロナウイルスの感染拡大が私たちの生活に大きな影響を与え、生活スタイルの変更などを余儀なくされた方も多いと思います。しかし、一方で少しずつではありますが感染状況が好転し、コロナからの回復の兆しが見え始めた方も多くいるのではないのでしょうか。2023年の卯年は、今までの数年間から大きく「飛躍」し、私たちの生活が大きく「向上」する年になってほしいものです。

新年を迎えましたが、中学校は残り3カ月で令和4年度の各種事業が終了となります。残り3カ月は今年度の成果と課題について検証することとなります。年度当初に作成した学校経営方針の中の、「目指す生徒像」には「相手を”慮る”ことのできる生徒」といった記載があります。「慮る」といった言葉は、「相手の事情や周囲の状況について思いを巡らせ、相手の気持ちを察することのできる人になって欲しい」といった願いであり、私自身の信条でもあります。今回は、私がそういった気持ちをもつきっかけとなった「宮沢賢治」の「雨ニモマケズ」の誌を取り上げ、話をさせていただきます。

「雨ニモマケズ」 宮沢 賢治

雨にも負けず 風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだをもち
慾はなく 決して怒らず
いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを自分を勘定に入れず
よく見聞きし分かり そして忘れず
野原の松の林の陰の小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子供あれば 行って看病してやり
西につかれた母あれば 行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば 行って怖がらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろといい
日照りの時は涙を流し
寒さの夏はおろおろ歩き
みんなにデクノボウと呼ばれ
褒められもせず 苦にもされず
そういうものに 私はなりたい

皆さんも一度は目にしたり聞いたことがあるのではないのでしょうか。実はこの詩は賢治の手帳に綴られていたもので、世に発表する意思のなかった詩とされています。

「雨ニモマケズ」は賢治が死んだ後、昭和9年（1934）に第1回宮沢賢治友の会で、賢治の弟の清六によって初めて公開されました。この会に出席するために賢治のトランクを使用しようとした清六が、手帳を偶然発見し、その中に書き綴られていたといいます。その後、「雨ニモマケズ」は昭和という時代を通して日本人の記憶の中に刻まれていきました。

私自身は小学生の時、教科書で学びましたが、「こんな人もいるんだ」「大変だなあ」といった感想で、「そういうものに私はなりたい」といった心境に共感できませんでした。ですが、それ以降この詩が脳裏から離れることはありませんでした。

大学生になって大学の講義で「雨ニモマケズ」と再会しましたが、小学生の時とは対照的に、不思議とこの詩に引き付けられていくような感覚がありました。

大学の講義の中で、「雨ニモマケズ」の詩には、仏教徒の理想的な生き方が表現されていることを知りました。宮沢賢治は、仏教、特に「法華経」に自らの生き方を見出し篤く信仰した人でした。その信仰は作品の端々に見ることができます。代表作「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」「セロ弾きのゴーシュ」「風の又三郎」等における作品の特徴は「擬人化」です。動物はもちろん、自然や建造物でさえ擬人化しています。あるときは樹木や森や山が人間と会話をし、あるときは電信柱が動き出します。それまでの日本文学にはほとんど見られなかった、万物を擬人化して描き出すという得意な表現を用いたのが宮沢賢治だったのです。この表現方法としての擬人化ですが、法華経の世界では世の中のありとあらゆる物、森羅万象(宇宙に存在する全てのもの)全てが仏

として現れます。また、「雨ニモマケズ」に表現された人物像のモデルとされるのが「常不輕菩薩（じょうぶきょうぼさつ）」です。常不輕菩薩は「法華經」の中に説かれる菩薩で、お釈迦様の前世として登場します。常不輕菩薩は自分の出会う人全てに礼拝し、褒め称えていたと言います。しかし、その一方で礼拝の行為が周囲の反感を買い、ひどい迫害に遭うこともあります。常不輕菩薩はこの実践を生涯貫いたとされます。常不輕菩薩は法華經の中で次のように説かれています。「私は深くあなたたちを敬います。」「驕り高ぶり輕蔑するようなことは決していたしません。」

宮沢賢治が、「雨ニモマケズ」の中に「愨はなく 決して怒らずいつも静かに笑っている」と著し、「みんなにデクノボウと呼ばれ褒められもせず 苦にもされず」と書き綴ったのは、宮沢賢治自身が「常不輕菩薩」でありたいと願った切なる心の叫びだったのかもしれない。この、「雨ニモマケズ」の誌は、賢治が療養中に自分の手帳に書かれたものです。療養中ではあっても、人々から相談があれば熱心にこれに応え、それは僅か37歳で息を引き取る前日まで行われていたそうです。森羅万象一切を仏として敬い、輕んずることのない姿勢、それが常不輕菩薩の姿であり、宮沢賢治が目指した生き方だったのです。

私は仏教徒ではありませんが、この詩の背景を知った時に、高校時代に亡くなった父親の姿がオーバーラップしました。この詩が、ずっと脳裏から離れなかった理由は、家族のため、社員のために休む間もなく働き、仕事に亡くなった生前の父の姿があったからだと思います。父の生き様は正に「他者を”慮る”」ものでした。

教師となった今でも、「そういうものに、なかなかなれない私」をもどかしく感じています。ですが、「そういうものに、私はなりたい」との願いを持ち続けることは重要なことだと思います。

「成ることを目的とするのではなく、成りたいと願い続け、反省しながらでも一步一步、歩みを進めていく」そんな日々をこれからも重ねていきたいと思っています。

「サウイフモノニ / ワタシハナリタイ」という最後の言葉から、宮沢賢治もあくまで「そういうものを目指していた」ものと思います。彼は決して「雨ニモマケズ」に書かれている通りの人ではありませんでした。

煩悶に満ち、悩み苦しむ生身の人間であったからこそ「デクノボウ（常不輕菩薩）」に憧れたのではないのでしょうか。「そういう者に、私は成りたい」…令和五年(2023) 新年を迎えるに当たり、皆さんは、どんな願いを胸に抱いているのでしょうか。

区立学校・幼稚園における今後の教育活動について(中野区教育委員会)

中野区教育委員会では、「新型コロナウイルス感染症対策と学校運営に関するガイドライン～学校の「新しい日常」の定着に向けて～の改訂について」を参考に学校教育の見直しが行われました。以下に主要な変更点について記載します。

1 給食時における会話について

給食事に座席の工夫（向かい合わない座席配置の工夫を行った上で、生徒間の感覚を最低1m程度確保する）や適切な換気の確保等の感染対策を徹底した上で、会話を行うことも可能とする。

2 儀式的行事について

- (1) 感染症対策を講じた短時間の計画とする。
- (2) 原則マスクを着用する。
- (3) 歌唱等を行う際は、換気を行い生徒同士の感覚を確保して実施する。
- (4) 体育館で実施する場合は、1～2学年(学校規模によっては生徒が一堂に会することも可)で実施するなど、会場等が密にならないよう計画する。
- (5) 保護者が来校する場合は、会場内や入退場時に密にならないように配慮する。
- (6) 来賓・地域関係者等を招く場合は、来賓席や控え室が密にならないように配慮する。

3 学校生活におけるマスクの着用について（従前通り）

- (1) 多くの生徒、教職員等が集まる場所で活動する場合や近くで会話する場合は、マスクを着用する。
- (2) 屋内において人との距離が確保でき、会話をほとんど行わないような場合はマスクの着用は必要ない。
- (3) 屋外において人との距離が確保でき、また人との距離が確保できなくても会話をほとんど行わないような場合はマスクの着用は必要ない。
- (4) マスク着用により熱中症などの健康被害の可能性が高いと考えられる場合には、換気が十分に行われている環境で、互いに十分な距離を保った上で、マスクを外すよう指導する。

※ 新型コロナウイルス感染症に罹患している生徒が増加傾向にある場合には状況に応じた指導を適直行う。